

第 25 回アルコール健康教育研修会

日時：平成 27 年 8 月 21 日（金）

場所：東京工科大学蒲田キャンパス 3 号館 3 階 30311 教室

報告者：井向 雅美

<研修内容>

○研究講演 飲酒と消化器疾患

山王病院 内科部長 堀江義則先生

アルコール使用障害による死亡は全死亡者の 5.9%にあたる。日本におけるアルコール消費量は 1960 年代以降著名な増加を示したが、1990 年以降はピーク時の約 90%で同じレベルに留まっている。

飲酒による内科的疾患としては、消化器疾患が最も直接的かつ特徴的な疾患で、その病態や臓器の種類とも多岐にわたる。大量飲酒により起こる消化器病変として、嘔吐の際に胃食道接合部の裂傷から吐血をきたすマロリーワイス症候群や胃食道逆流症が知られている。また急性胃粘膜病変や消化管潰瘍との関係も示唆されている。食道がんや大腸がんの発生率も上がる。具体的にアルコール性膵障害と肝障害について説明された。

○基調講演 アルコールをめぐる諸課題

新町クリニック所長 高木 敏先生

未成年者の飲酒割合の推移は 1996 年から減少傾向にある。2012 年厚生労働省の研究班調査によると中高生では男子よりも女子の飲酒経験が高くなったと報告がある。

アルコールによって起こる臓器障害には三つの特徴がある。①飲酒期間が長くなると障害は現れない。②障害される場所には個人差がある。③禁酒すると速やかに改善する。

飲酒問題は個人の健康障害（メタボリックシンドローム、高血圧、糖尿病、精神疾患など）だけでなく、労働意欲の減退や作業能率の低下、労災事故など企業にとっても大きな損害が発生している。保健指導においても、どのように節酒させるか断酒しなければならないかが課題となっている。

○教育講演 飲酒防止教育にどのように取り組むか

青少年喫煙等健康問題研究会代表 小林賢二先生

若者を取り囲んでいる問題を通じて、飲酒の問題は単独では考えられない。喫煙、飲酒、薬物乱用、性の問題などに加えて最近では、スマホ、IT、SNS の問題が発生している。

お酒の害は分かっているけど、行動と結びつけることが出来ないのも、その指導が大切である。指導内容としては、脳の機能低下、肝臓への影響、性ホルモンの異常、アルコール依存症、未成年を守るための法律、社会的影響などがある。知識の指導を行い、危機感知能力を育成し、正しい行動の判断が出来るようになり、健康は自分で守る行動へと変容させる指導が重要である。

○実践報告と意見交換 コーディネータ 日本体育大学特別講師 井ロー成先生

- ・ 小学校 東京都港区教育委員会指導室統括指導主事 太田裕子先生
保健学習の目標、内容、ねらいについて担任と管理職が連携（TT体制）して授業計画を立てた報告をされた。
- ・ 中学校 川口市立在家中学校養護教諭 佐藤真紀先生
学校内で未成年者飲酒防止スローガン募集キャンペーンを行った。保健研修会では生徒中心で「アルコールとリスク」について発表会を行った。研修会では生徒対象にアルコールパッチテストの実践を行った報告をされた。
- ・ 高等学校 神奈川県立神奈川総合産業高等学校教諭 鯨吉 剛先生
飲食と健康の授業を通じて、健康だけでなく社会への影響についても学習した。学習方法としては飲酒についてのクロスロードゲームを行った報告をされた。
クロスロードゲームとは、問題提示に対して疑似体験をし、Yes or No で意思決定を行い、理由について話し合いを行う。
- ・ 学校薬剤師 一般社団法人東京都学校薬剤師会 田中順子先生
喫煙・飲酒は大人になったら許される行動なので教材としての取り扱いが難しい。小・中・高の学習指導要領を確認してアルコール健康教育に取り組んだ報告をされた。東京都学校薬剤師会作成のPPTについても紹介された。